

『倫理学論究』、vol. 4, no. 1 の内容

本号は、魚住洋一氏の仕事をめぐって二つの論稿とそれにたいする魚住氏のリプライを収録している。ここに収録した論稿はもともと京都生命倫理研究会（2016年12月24日、於京都大学）において「魚住洋一先生の業績の検討会」というセッションで発表されたものである。その散逸を惜しみ、あわせて魚住洋一氏からのリプライを併録することで、氏が提起された問題と論点を検討し、共有し、継承していく機縁としてここに収録する。

魚住洋一氏は1948年に生まれ、京都大学文学部哲学科哲学専攻を卒業後、神戸大学大学院文学研究科と京都大学大学院文学研究科で博士前期課程を修了し、京都大学大学院文学研究科博士後期課程を了えられた。その専門とするところは現象学である。1984年に京都市立芸術大学に赴任されてから、30年間の長きにわたって勤められ、2014年に京都市立芸術大学から名誉教授を授与された。その後、龍谷大学で教授を勤められ、2017年3月末をもって退職されるということから、上記の検討会が催されたわけである。

現象学といえば、ボーヴォワールが『女ざかり』のなかで記しているパリのモンパルナス街のカフェ、ベック・ド・ガースでのレーモン・アロンとサルトルのやりとり——「ほらね、君が現象学者だったらこのカクテルについて語れるんだよ、そしてそれは哲学なんだ!」。サルトルは感動で青ざめた——がひとつの伝説となっている。魚住氏の世代の日本の現象学者の多くはまさにそのようなものとして現象学をうけとめたように思われる。氏はフッサールを中心に現象学研究を進められたが、まずはフランスの現象学の洗礼を受けたといわれる。現在、日本の現象学は文献の細部に没頭する研究が多々みられるが、現象学的記述の本来の魅力は、それをとおして対象がまさに今までそうはみえてこなかった新たな姿で現われてきて、読む者に目を覚まさせるような思いを抱かせるところにあるだろう。魚住氏の仕事はまさにその現象学の魅力を伝えるものである。

いうまでもなく、「事象そのものへ」の精神はテキストの着実な読解によってのみ支えられる。魚住氏の世代は、*Husserliana*のなかに膨大な遺稿が収められて公開されるようになっていくその過程のなかで、漸次入手しうるテキストを独仏の二次文献を参照しながら、その思想の核心を把みとるようにして読み解いていった。そのような蓄積が現在の日本における現象学研究の活況を用意したことは否定すべくもない。

本号の内容、『倫理学論究』、vol. 4, no. 1, (2017), pp. 1-2.

1970年代半ばから80年代半ばにかけて、京都大学には「イデーン研究会」という研究会があった。当時、京都大学大学院で現象学を学んだ者のほとんどがその研究会に参加しており、学外の大学院生もまた出入りしていた。魚住氏はその中心にあった。ご本人はそのお人柄から「教える」といった姿勢はみじんもみせず、後輩には研究会が自由な意見交換の場であることを再三強調された。実際、会終了後も百万遍にあった喫茶店学士堂に席を移してから闊達でのびのびした会話が続けられ、その集まりは研究会の魅力のひとつだった。とはいえ、「イデーン研究会」のフッサール読解の精密さのレベルは、氏の的確な指摘なしにはありえなかった。

氏の研究の主題は、感情、経験、身体、生活世界、自己と他者、和辻哲郎論、性、芸術作品の考察等、多岐にわたる。それについては、「魚住洋一氏の業績」を参照されたい。

(品川哲彦 記)